

私が漢方に携わってからもう四十五年になります。この間、二十年以上にわたって柴田良治先生にご指導いただきました。先生は日本古来の伝統ある漢方を継承する数少ない医師の一人でした。

柴田先生は、「漢方と西洋医学は異質のものなので、西洋医学の知識では漢方は理解できない」と言われていました。経験によって発達した漢方の効果の多くは、科学的知識では説明できないのです。

古来より明治時代の初めまでは臨床の知識と経験が継承されてきた漢方ですが、明治政府の政策によって一度は途絶えてしまいました。

以後は極めて少数の人達によって辛うじて受け継がれてきましたが、多くの知識が失われてしまったのです。

失われた伝統を取り戻すためには、漢方が栄えていた江戸時代から明治時代初期までに使われていた書物を読み解くことが必要です。優れた先人の経験に基づいて著された古典は貴重な知識の宝庫であり、「古典はいつも新しい」という柴田先生の言葉の通り、今でも新たな発見に事欠くことがあります。

先生からは古典を通じて多くを学びましたが、江戸時代の処方集「古今方彙」については特に詳しく教えていただきました。また、先生の処方集である「黙堂柴田良治処方集」の編集のお手伝いもさせていただきました。その処方集は、漢方処方方の出典の内容に加えて「勿誤藥室方函口訣」と「方読弁解」を引用し、古典に拠って漢方処方方を活用することができるものです。

私は「黙堂柴田良治処方集」を座右の書とし、「古今方彙」とその解説書である「方彙口訣」や、その他の古典を適宜に参照することで漢方処方方の応用に役立ててきました。

処方方の検索には「黙堂柴田良治処方集」付録の「病名別 症状別 索引」を常用しましたが、「古今方彙」や「万病回春」など古典の病名分類も殊の外重宝することが屢々ありました。

しかし、古典をひもどくことに思いのほか手間取ることがあり、また、参照する書も増えたことから、資料をまとめて古典に接しやすくなりたいと考えるに至りました。

この度、「黙堂柴田良治処方集」を基として、資料を追加し再編することにより、「古今方彙」や「方彙口訣」に倣った処方集と口訣集を兼ねた書をまとめることができました。

漢方によりよい効果を求めるための一助になれば幸いです。

平成二十九年十二月

北山進三